



The Pragmatics Society of Japan

日本語用論学会

PSJ2014 CONFERENCE PROGRAM

第 17 回（2014 年度）大会プログラム

日時： 2014 年 11 月 29 日（土）／11 月 30 日（日）

会場： 京都ノートルダム女子大学 新ユージニア館

〒606-0847 京都市左京区下鴨南野々神町 1 番地

電話： 075-781-1173 （代表）

大学 HP： <http://www.notredame.ac.jp/>

アクセス： <http://www.notredame.ac.jp/accessmap.html>

JR をご利用の方

- ・ JR「京都駅」から（地下鉄乗車時間 16 分）
地下鉄烏丸線「国際会館」行き乗車
→「北山駅」下車、1 番出口から東へ徒歩 7 分
- ・ JR「二条駅」から（地下鉄乗車時間東西線 4 分・烏丸線 10 分）
地下鉄東西線「六地藏」行き乗車
→「烏丸御池駅」にて地下鉄烏丸線「国際会館」行きに乗り換え
→「北山駅」下車、1 番出口から東へ徒歩 7 分

阪急電鉄をご利用の方

- ・ 阪急「烏丸駅」から（地下鉄乗車時間 10 分）
地下鉄烏丸線「国際会館」行きに乗り換え（地下鉄「四条駅」）
→「北山駅」下車、1 番出口から東へ徒歩 7 分

近鉄電車をご利用の方

- ・ 近鉄「竹田駅」から（地下鉄乗車時間 22 分）
地下鉄烏丸線「国際会館」行きに乗り換え（地下鉄「竹田駅」）
→「北山駅」下車、1 番出口から東へ徒歩 7 分

京阪電車をご利用の方

- ・ 京阪「出町柳駅」から（市バス乗車時間約 10 分）
市バス 4 号系統「上賀茂神社」行きに乗り換え（市バス「出町柳駅前」）
→「野々神町」下車すぐ、もしくは「北園町」下車北へ徒歩 5 分

◎大会スケジュール（要旨）・会場案内

29日（土）

9：30～	大会受付
10：00～	ワークショップ
13：00～	会員総会
13：30～	研究発表
16：15～	基調講演
18：00～	懇親会

30日（日）

9：00～	大会受付
9：30～	研究発表
11：25～	ポスター発表
13：30～	シンポジウム
16：00～	閉会式

大会受付	3階 ロビー（初日9：30～大会終了まで）
書籍展示	3階 E303 教室、E302 教室
休憩室	3階 E301 教室、4階 ラミティエ
大会本部	3階 E306 教室

*昼食場所：

29日（土）、30日（日）とも、学内食堂（会場内1F）が利用できます。是非ご利用ください。

ただし、臨時営業（両日とも12:00～13:00のみ、簡易メニューでの営業）となりますので、悪しからずご了承ください。

なお、会場外での昼食は、地下鉄北山駅周辺（会場から徒歩10分程度）、北山通り（徒歩10分圏内）に数軒ずつございます。

11月29日（土曜日）

ワークショップ（10:00～11:40）

A会場 ワorkshop 1 [4階 E401]

- 「中断節」の語用論と類型論：自然発話・インターネット・メディアでの使用例を対象に

企画・司会：堀江 薫（名古屋大学）

指定討論者：大堀 寿夫（東京大学）

1. 相互行為の資源としての「けど」中断節構文

横森 大輔（九州大学）

2. 韓国語における中断節構文

金 廷珉（麗澤大学）

B 会場 ワークショップ 2 [4 階 E402]

● 合コンの談話分析：ポライトネスとジェンダーにまつわる規範と実際

司会：谷 智子（三重大大学）

1. 合コンマニュアル本にみられるイン／ポライトネスとジェンダーイデオロギー

柳田 亮吾（大阪経済法科大学）

2. 合コンにおける協働的フレーム構築

谷 智子（三重大大学）

3. 合コンに見られるジェンダー・パフォーマンスとフェイスワーク

大塚 生子（近畿大学）

C 会場 ワークショップ 3 [4 階 E403]

● 慣習化をめぐる日本語配慮表現の発想

司会：小野 正樹（筑波大学）

1. 慣習化された日本語配慮表現の発想

小野 正樹（筑波大学）

2. 慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義

山岡 政紀（創価大学）

3. 配慮表現としての注釈表現に関する一考察

牧原 功（群馬大学）

D 会場 ワークショップ 4 [4 階 E404]

● Love, Sex, and Marriage: Crosslinguistic Comparisons of Conceptual Metaphors

Organizer/Chair: CHIANG, Wen-Yu (National Taiwan University)

1. How Deep Is Your Love?: A Comparative Study of Metaphorical Quantification of “Love”

LIAO, Yu-Hsuan (National Taiwan University)

2. Behold, I am Coming Soon!: A Study on the Conceptual Metaphors of Sexual Orgasm in 24 Languages

CHIANG, Yen (National Taiwan University)

3. MARRIAGE IS BUSINESS: A Corpus Study of Marriage Metaphor in English and Chinese

CHANG, Debbie Yi-Han (National Taiwan University)

会員総会（13:00～13:20）[3 階 ND ホール]

司会：山本 英一（関西大学）

- | | |
|------------|------------------------------|
| 1. 会長挨拶 | 林 宅男（日本語用論学会会長・桃山学院大学） |
| 2. 会計報告 | 長友 俊一郎（日本語用論学会事務局幹事・関西外国語大学） |
| 3. 編集委員会報告 | 加藤 重広（日本語用論学会編集委員長・北海道大学） |
| 4. 事務局長報告 | 山本 英一（日本語用論学会事務局長・関西大学） |

研究発表（13:30～16:05）

A 会場 [4階 E401] 日本語発表

① 13:30-14:05 ② 14:10-14:45 ③ 14:50-15:25 ④ 15:30-16:05

司会：秋田 喜美（大阪大学）

1. 談話における項の形式とその方略

久好 孝子（国際医療福祉大学）

2. 日本語の直示述語「V-てくる」の歴史―「行為の方向づけ」を表す用法の発達―

澤田 淳（青山学院大学）

司会：金 アラン（上智大学）

3. 断り発話における程度副詞について―配慮表現としての機能を中心に―

リナ・アリ（筑波大学大学院）

4. 三者間の共同作業における言語行動―親疎関係による課題達成および対人関係調整の相互行為―

ツォイ・エカテリーナ（東京外国語大学大学院）

B 会場 [4階 E402] 日本語発表

① 13:30-14:05 ② 14:10-14:45 ③ 14:50-15:25 ④ 15:30-16:05

司会：服部 明子（三重大大学）

1. 日本人大学生同士の会話にみる重複発話：異ジャンル間比較を通じた機能分析と協調性

竹田 らら（東京電機大学）

2. 第二言語話者である子どもへの story-retelling interview test の会話分析：第二言語会話における「記憶」

岡田 悠佑（大阪大学）

司会：田中 廣明（京都工芸繊維大学）

3. 習慣を表す英語進行形の事態解釈を動機づけている推論プロセスについて

原田 依子（東京電機大学）

4. considering の前置詞・接続詞用法の共時的研究 ―レジスターの観点から―

林 智昭（京都大学大学院）

C 会場 [4階 E403] 日本語発表

① 13:30-14:05 ② 14:10-14:45 ③ 14:50-15:25 ④ 15:30-16:05

司会：滝浦 真人（放送大学）

1. 普通体／丁寧体世界の規範が授受補助動詞テクレル／テモラウの選択に与える影響

京野 千穂（名古屋大学大学院）

2. 中国人日本語学習者の「不同意」行為 ―ヘッジ使用における母語転移の可能性―

堀田 智子（東北大学大学院）

司会：金 廷珉（麗澤大学）

3. 付加的非従属化のマーカ―「みたいな」の統語語用論的分析

劉 曉萃（北海道大学大学院）

4. 「ノ(ダ)ね」の語用論的機能 ―具現化形式と音調の観点から―

市村 葉子（名古屋大学大学院）

D 会場 [4階 E404] ①② English Presentations ③④ 日本語発表

① 13:30-14:05 ② 14:10-14:45 ③ 14:50-15:25 ④ 15:30-16:05

司会：北野 浩章（愛知教育大学）

1. Reconsidering the Validity of Examining Constituent Order in terms of Information Status of Constituents

YAMADA, Yoko (Niigata University)

2. On the Negative Use of the Japanese Intensifier *totemo* 'very'

SAWADA, Osamu (Mie University)

司会：植野 貴志子（東京都市大学）

3. 聞き手が知らない人物の名前披露—日本語会話における有標な指示—

須賀 あゆみ（奈良女子大学）

4. 諷喩とは何か：談話分析的レトリック研究の試み

平川 裕己（神戸市外国語大学大学院）

E 会場 [4階 E405] English Presentations

① 13:30-14:05 ② 14:10-14:45 ③ 14:50-15:25 ④ 15:30-16:05

Chair: YOKOMORI, Daisuke (Kyushu University)

1. The Pragmatics of Intelligible Pronunciation in English as a Lingua Franca in Japan

O'NEAL, George (Niigata University)

2. Analyzing the Pragmatic Force of Sentence Final Particles as a Function of Actual Use

KROO, Judit (Stanford University)

Chair: YOSHIDA, Etsuko (Mie University)

3. Demonstratives and Deictic Shift in Narrative

SUGIYAMA, Sayaka (no affiliation)

4. *Gaikokujin ja arimasen* (I'm not a foreigner): An Analysis of the Interactive Construction and Contestation of (not) Being a Foreigner

BUSHNELL, Cade (University of Tsukuba)

基調講演 (16:15~17:45) [3階 ND ホール]

司会：久保 進（松山大学）

— Keynote Lecture —

Speaker: Prof. Michael PERKINS (University of Sheffield)

Title: Explaining Pragmatic Impairment: Finding the Best Fit between Pragmatic Theory and Clinical Data

懇親会（18:00～20:00）

会場：1階 カフェテリア

会費：学生 2,000円（値下げしました！）

一般 4,000円

（交流と議論の場です。お一人でもご遠慮なくお越しください）



11月30日（日曜日）

研究発表（9:30～11:25）

A 会場 [4階 E401] 日本語発表

① 9:30-10:05 ② 10:10-10:45

司会：谷口 一美（京都大学）

1. 現代日本語におけるメタファー表現としての「風」の考察—なぜ「先輩風」は吹くのか？—

松浦 光（名古屋大学大学院）

2. メタファーと発話の連鎖 —「枠組み」設定としてのメタファー表現—

杉本 巧（広島国際大学）・鍋島 弘治朗（関西大学）

B 会場 [4階 E402] 日本語発表

① 9:30-10:05 ② 10:10-10:45 ③ 10:50-11:25

司会：井上 逸兵（慶應義塾大学）

1. 英語の名詞派生形容詞に見られる比喩的意味の前景化

田丸 歩実（京都大学大学院）

2. 文章理解のメカニズムの解明にむけて —括弧の曖昧性はどのように解消されるか—

黒田 一平（京都大学大学院）

3. 「ほめごろし」の言語学

大久保 朝憲（関西大学）

C 会場 [4階 E403] 日本語発表

① 9:30-10:05 ② 10:10-10:45 ③ 10:50-11:25

司会：長友 俊一郎（関西外国語大学）

1. 多読用教材としての英語母語話者向け絵本における結束性と直示性：文部科学省検定教科書との比較

大槻 きょう子（広島修道大学）

2. 語用論的観点に基づく高等学校英語教科書の分析：「英語表現Ⅰ」の事例を中心に

水島 梨紗（札幌学院大学）

3. 政治的イデオロギーはどのように表象されるのか？—チョムスキーと福島親子との会談—

藤本 大樹（名古屋大学大学院）

D 会場 [4階 E404] English Presentations

① 9:30-10:05 ② 10:10-10:45 ③ 10:50-11:25

Chair: SHUDO, Sachiko (Waseda University)

1. The Difference between “Otaku” and “Geek” in English: A Frame Semantics Analysis
FIGUEIRO TEIXEIRA, Lilian (Keio University)
2. Gender and Politeness on Conversational Styles in Intercultural Communication
ITAKURA, Hiroko (Hong Kong Baptist University)
3. Exploring the Illocutionary Force of Words Versus Images in Multi-Modal Texts
McDONALD, Peter (J. F. Oberlin University)

E 会場 [4階 E405] English Presentations

① 9:30-10:05 ② 10:10-10:45

Chair: HATA, Kaori (Osaka University)

1. Designed Silences: A Study of Silences in Talk in Interaction
BHATTA, Baikuntha (Kanagawa University)
2. When Not Talking is ‘Talking’: The Functions of Silence
HUI, Jon S. Y. (The University of Hong Kong)

ポスター発表 (A) 11:25~12:25 (B) 12:25~13:25 [3階大講義室]

- A1. Semantic-pragmatic Analysis of Japanese Case Markers ‘Wo’ and ‘De’
CHEE SIONG, Lee (Graduate School of Foreign Languages, Sapporo University)
- A2. Men and Women Interact Differently: Analyses of Compliments among Gender in Japanese Conversation
FUJIMURA-WILSON, Kayo (Yamaguchi University)
- A3. 自己肯定感を育む通級指導学級での実践
石坂 光敏 (東京学芸大学大学院)・権 明愛 (十文字学園女子大学)
- A4. 言外の「文脈的含意」に対して発せられるケドの機能
横田 敦子 (お茶の水女子大学大学院)
- A5. Get 受動文と再帰代名詞を含む Get 使役文の関係―聞き手の解釈に着目して―
久井田 直之 (日本大学)
- A6. 商標の普通名称化の評価をめぐる言語学的分析
堀田 秀吾 (明治大学)・日置 孝一 (神戸大学)・藤田 政博 (関西大学)
- B1. Re-examining the “Sentence-final” Particle Ne in Language Learners’ Conversations
GANIR, Paul (Stanford University)
- B2. 疑問文を引用して主節で答える表現の手續きの意味
山泉 実 (明海大学)
- B3. 疑問文の文末表現に関する日中対照―動詞述語の『の (ん) ですか』諾否疑問文を対象に―
林 香淑 (首都大学東京大学院)

- B4. 日本人英語学習者による意見文の論理展開一言語形式とその機能に着目してー
奥切 恵（東京医療保健大学）・伊集院 郁子（東京外国語大学）・小森 和子（明治大学）
- B5. 日タイ両言語における「申し出」「依頼」に対する「断り」表現の研究ー日本人およびタイ人の社会人を調査対象としてー
福原 美怜（京都精華大学大学院）
- B6. 異なる談話環境を繋ぐ言語行動ー遠隔会話における対面性構築を中心にー
吉田 睦（東京学芸大学附属国際中等教育学校）

シンポジウム（13:30～16:00） [3 階 ND ホール]

Symposium: Clinical Discourse

Topic: What kind of contribution linguistic pragmatics can do to the studies of interaction in clinical and medical fields?

Chair: KUBO, Susumu (Matsuyama University)

Speakers: UEDA, Teruko (Aomori Public University)

OOI, Manabu (Kanazawa University)

KATO, Sumi (Aomori Chuo Gakuin University)

Commentators: HAYASHI, Reiko (Konan Women's University)

MATSUI, Tomoko (Tokyo Gakugei University)

PERKINS, Michael (University of Sheffield)

閉会式（16:00～16:10） [3 階 ND ホール]

閉会挨拶 山本 英一（日本語用論学会事務局長・関西大学）

講演・発表要旨

11月29日（土曜日）

ワークショップ（10:00～11:40）

A 会場 ワークショップ1 [4 階 E401]

● 「中断節」の語用論と類型論：自然発話・インターネット・メディアでの使用例を対象に

企画・司会：堀江 薫（名古屋大学）

指定討論者：大堀 壽夫（東京大学）

本ワークショップは、日本語の話し言葉で顕著に見られる「中断節(suspended clause) (例1)」(大堀 2002) の語用論的特徴と類型論的特徴の解明に向け、中断節現象が豊富に観察される日本語と韓国語を対象とした2つの研究を紹介し、今後の展望を示すことを目的とする。

(1) あたしはさっきも話したんだけどー (Mr. O Corpus)

本発表は、中断節の記述的・言語類型論的研究のこれまでの進展と現状について概観を提供する。具体的には、日本語学の記述的「言いさし」研究の蓄積(白川 2009)や言語類型論の insubordination (従属節の主節化) 研究の展開 (Evans 2007) に言及し、企画者自身の日韓語の中断節研究(堀江・パルデシ 2009, 堀江 2014) について触れる。中断節研究においてどのようなデータが対象となりうるかという点に関し、企画者が参加した共同研究プロジェクトで開発された Mr. O Corpus を紹介する。

参考文献：(1) 大堀壽夫. 2002. 『認知言語学』. 東京大学出版会. (2) 金廷珉. 2014. 「韓国語の引用修飾節の主節化-日本語との対比を通じて-」. 『日本語複文構文の研究』. 益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦(編). ひつじ書房, 695-717.

1. 相互行為の資源としての「けど」中断節構文

横森 大輔（九州大学）

本発表では、日本語自然会話における「けど」中断節の分析を通じ、中断節という言語形式が有する相互行為上の特徴について検討する。「けど」節の中断節 (Nakayama & Nakayama 1997) は、日本語中断節の中でも特に頻度の高い一つであるが、実際の会話文脈の中でいつ何のために参加者が当該の発話形式を利用しているかという点については詳細が明らかになっていない。発表者は、相互行為言語学 (Fox et al. 2013) の枠組みに依拠し、約 18 時間の会話データから「けど」中断節の実例 50 例を収集・分析して 3 つの顕著なパターンを同定した。3 パターンに共通して、相手にやり取りの主導権を委ねたまま反応を呼び込む発話となっているという特徴がみられた。これは同様の発話が統語的に完了した形式でなされた場合とは対照的であり、「けど」節に関する文法知識が相互行為上の資源として利用されていることが示唆される。

参考文献：(1) Nakayama, T. & K. Nakayama. 1997. "Japanese kedo: Discourse Genre and Grammaticization." *Japanese/Korean Linguistics* 6. 607-618. (2) Fox, B., S. Thompson, C. Ford & E. Couper-Kuhlen. 2013. "Conversation Analysis and Linguistics." In: Jack Sidnell and Tanya Stivers (eds.). *The Handbook of Conversation Analysis*. Wiley Blackwell, 726-740.

2. 韓国語における中断節構文

金 廷珉（麗澤大学）

本発表では韓国語のインターネットやテレビ番組などにおいて観察される 3 種類の中断節-(I)引用連体修飾節「ta-nun」(「という」)、(II)連体修飾節「nun」(連体形止め)、(III)並列節「ko」(「～し。」)の機能について考察する。その結果、(I)～(III)は後続文(主節)の復元または想定が可能な場合もあり、主節

化への定着度という点では程度性は見られるものの、(I)は命題内容の「情報の源を不明瞭に(大堀 2002:131)」し、話し手の心的態度を表明、聞き手を意識した間主観的な意味を体現する(金 2014)、(II)はブログのタイトル、テレビ番組のテロップにおいて発話内容の要約・解釈の提示、(III)は単なる事柄の羅列というよりは、前後の文内容と結びつけながら文を完結するといった、既存の従属節としての用法とは異なる一定の語用論的機能を持つことを示す。

参考文献：(1) 大堀壽夫. 2002. 『認知言語学』. 東京大学出版会. (2) 金廷珉. 2014. 「韓国語の引用修飾節の主節化-日本語との対比を通じて-」. 『日本語複文構文の研究』. 益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦(編). ひつじ書房. 695-717.

B 会場 ワークショップ2 [4 階 E402]

● 合コンの談話分析：ポライトネスとジェンダーにまつわる規範と実際

司会：谷 智子（三重大学）

少子化や未婚率の増加などが社会問題化する中、合コンは今日、若者の長期的な恋愛やさらには結婚のパートナー探しのためのカジュアルな場として広く認知されている。近年しばしば耳にする「婚活」においても、多くの若者がパートナーとなる異性との出会いを求めて合コンに参加する。このような社会的関心の高さにもかかわらず、北村・阿部 (2007) の社会学的観点からの研究はあるものの、特に実際の合コンにおける談話資料を基にした実証分析は管見の限り行われていない。

本ワークショップでは、多角的な観点によって合コンを分析するために、合コンにおけるイン／ポライトネス評価に関する規範的な言説の分析を手始めに、実際の合コン場面を記録した自然会話における自己紹介場面の分析、また同合コン場面における「女性・男性らしさ」の提示と評価におけるフェイスワークの三つについて考察する。

1. 合コンマニュアル本にみられるイン／ポライトネスとジェンダーイデオロギー

柳田 亮吾（大阪経済法科大学）

本発表では合コンマニュアル本を取り上げ、そこで営まれる relational work (Locher and Watts 2008) について言及されているメタ語用論的言説を、ジェンダーに注目しつつ、分析する。

イン／ポライトネスとジェンダーの関係を研究するにあたって、Sara Mills (2005) は社会に敷衍したメタ語用論的な言説の重要性を説いている。聞き手は特定の実践の共同体の規範を参照することで、話し手の（言語的）振る舞いに特定の評価を下しており、その評価基準はジェンダーによって異なる。本発表ではこの Mills の指摘を出発点に、合コンマニュアル本において、どのような振る舞いが肯定的／否定的に評価されているのかを、ジェンダー・ダブルスタンダードに注目しつつ分析する。分析にあたっては、Goffman (1967) のいうところの敬意と品行の二つの分析概念から捉え、特定の行為がジェンダーとの関係でどのように意味付けられているのかを明らかにする。

参考文献：(1) Goffman, E. 1967. *Interaction Ritual*. Pantheon Books. (2) Locher, M. A. and Watts, R. J. 2008. "Relational work and impoliteness: Negotiating norms of linguistic behavior." In: D. Bousfield and M. A. Locher (eds.). *Impoliteness in Language*. Mouton de Gruyter, 77-99. (3) Mills, S. 2005. "Gender and impoliteness." *Journal of Politeness Research* 1(2). 263-280.

2. 合コンにおける協働的フレーム構築

谷 智子（三重大学）

本発表では、実際の合コン会話データを分析資料とし、これまでの初対面談話研究との比較を通して、参加者が合コン特有のフレームを協働構築する様を考察する。

スピーチレベルに着目すると、全グループにおいて丁寧体基調であり、相手の領域に踏み込むことを避けるという形でポライトネスが表示されていた。これは初対面場面に関する先行研究(宇佐美 (2001)、三牧 (2013) 等)の結果と合致する。一方で、合コンでは初対面の短時間で異性に接近せねばならない。

その目的を達成するために表示されるポライトネスを、①ターンテイキング、②褒め、③冗談、④ゲームの導入、の4点において見出した。このような相互行為では、参加者間の接近が可能となるようなフレームが協働して構築されていた。また、このようなフレームは男性が主導し、女性がそれに協力する形で構築されるという点も明らかになった。

参考文献：(1) 三牧陽子. 2013. 『ポライトネスの談話分析 初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版. (2) 宇佐美まゆみ. 2001. 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想」. 『談話のポライトネス』. 国立国語研究所. 9-58.

3. 合コンに見られるジェンダー・パフォーマンスとフェイスワーク

大塚 生子 (近畿大学)

本発表では、実際の合コン場面の談話分析を通し、女性・男性それぞれが提示するふるまいのジェンダー性について、Goffman (1959) に示される自己提示 (performance) の観点から考察を行う。

Goffman (1959) は performance を、ある特定の場面において人々が自らの利益のために望ましい自己を提示しようとする相互行為上のふるまいであると説明する。合コンでは異性からパートナーとして選択される必要があるため、各人が女性／男性らしさを提示して見せ、同性参加者から卓越しなければならない。しかし、同時に同性の友人間の人間関係への配慮も要求される。このような performance とそこで交渉される複雑なフェイスのやりとりを、女性については「かわいらしさ」の提示と同性参加者による「女性らしい」ほめを通した相対的なフェイス保持が観察される場面、男性については「ボケとつつこみ」によって協働的に場をリードし、両者が相乗的に「男性らしさ」を提示してフェイスを高揚させている場面を通して詳察する。

参考文献：Goffman, E. 1959. *The Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Anchor Books.

C 会場 ワークショップ3 [4 階 E403]

● 慣習化をめぐる日本語配慮表現の発想

司会：小野 正樹 (筑波大学)

コミュニケーション上の対人的配慮行動を記述した「ポライトネス理論」について、日本語言語表現の慣習化に関して考察する。英語におけるポライトネスでは、Leech (1983) において述べられているように、その時々話者の判断によって動機づけられた非慣習的な (non-conventional) 言語行動によって表現される。したがって固定された言語形式によって表現されるということが少ない。一方、日本語においては、英語同様に非慣習的なポライトネスの言語行動も多く見られるのと同時に、ポライトネスの意識に動機づけられた表現形式が一定程度以上に慣習化して成立した固定的な表現群が存在するが、その発想について、発想のパラメーターを小野が提案する。次に、山岡が辞書の意味から離れた語用論的意味としての記述を紹介する。最後に、牧原が日本語教育においても配慮表現の重要性を主張する。

1. 慣習化された日本語配慮表現の発想

小野 正樹 (筑波大学)

コミュニケーション上の摩擦を鑑みると、「何を言ったか」という問題と、「何だその言い方は」という問題に分けられる。このことは、典型的には「何て言った?」という発話は、その両者に焦点を当てられることから伺えよう。こうした問題の解決は、言語形式による敬語やスピーチレベルではなく、言語内容の発想も関わるものである。Leech (1983) の『ポライトネスの原理』は、「負担」と「利益」を対立させた上で、大/小の関係から原則を提案した。しかし、それ以外にも、南 (1974) で挙げられている、上げ/下げ、強/弱、近づき/はなれ、あらたまり/くだけ、負わせ/負い、美/醜、おそれ/あなどり、ためらい/すぐの発想から慣習化された日本語配慮表現の特徴を観察する。

参考文献：(1) 南不二男. 1974. 「現代敬語の意味構造」. 『国語学』 第 96 集. 104-86. (2) 姫野伴子. 1992.

「負担と利益」.『埼玉大学紀要人文科学編』第41巻. 埼玉大学教養部. 47-56. (3) Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. Longman.

2. 慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義

山岡 政紀 (創価大学)

日本語の定型化した配慮表現の事例を取り上げ、言語形式が有する本来の語義が、配慮意識に基づく慣習化の結果として希薄となり、日本語においてポライトネスの定型表現として機能している実態を述べ、それをもとに少なくとも日本語研究においてはポライトネス理論の中に配慮表現研究というカテゴリーを設けることの必然性を主張する。例として、「つまらないものですが」「ちょっと」等を挙げて、辞書的意味ではなく、こうした表現の配慮表現としての役割を示す。発表者は「配慮表現」の定義を「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つための配慮として用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現」と修正することを提案する。なお、慣習化と言っても文法化とは違い、あくまでも限られた発話状況 (FTA) に対する動機づけが完全に消滅して生じるものではないことを述べる。

参考文献：(1) 山岡政紀. 2004. 「日本語における配慮表現研究の現状」.『日本語日本文学』第14号. 創価大学日本語日文学会. 17-39. (2) 山岡政紀・牧原功・小野正樹. 2010.『コミュニケーションと配慮表現』. 明治書院.

3. 配慮表現としての注釈表現に関する一考察

牧原 功 (群馬大学)

日本語の対人配慮を表す成分として、一語の副詞にとどまらずより大きな単位に注目し、その慣習化について検討する。例えば文中で副詞的成文として用いられる従属節「恐れ入りますが」「つまらないものですが」「お忙しいところ恐れ入りますが」などがその対象となる。

日本語学習者が文法的な誤用を起こしても、それを聞いている母語話者は大きな問題とは認識せず、母語話者が学習者の発話を聞いて大きな違和感を覚えるのは対人配慮にかかわる表現であることが調査によって把握できつつある。このような点から考えると、慣習化された注釈表現を習得することは日本語学習者の重要な学習項目たりえと考える。

しかし、従属節のような大きな単位では慣習化 (= 定型化) はそれほど進んでいない。今後は、更に文レベルでの表現まで視野に入れて考察を進める必要も出てくる可能性もあり、慣習化をどのようにとらえるべきかを考えたい。

参考文献：(1) 国立国語研究所. 2006.『言語行動における「配慮」の諸相』. くろしお出版. (2) 野田尚史・高山善行・小林隆(編). 2014.『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的差異』. くろしお出版. (3) 山岡政紀・牧原功・小野正樹. 2010.『コミュニケーションと配慮表現』. 明治書院. (4) 三宅和子. 2011.『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』. ひつじ書房.

D 会場 ワークショップ4 [4 階 E404]

● Love, Sex, and Marriage: Crosslinguistic Comparisons of Conceptual Metaphors

Organizer/Chair: CHIANG, Wen-Yu (National Taiwan University)

Love, sex, and marriage are the three most important key concepts throughout the human history with respect to the reproduction of mankind, the stabilization of social structures and civilization, and the personal pursuit of emotional and physical well-being. Over the past decades, a growing body of research has investigated these three concepts within Lakoff and Johnson's (1980, 1989, 1999) framework of conceptual metaphors. However, very little attention has been paid to the following topics, which this workshop seeks to probe: (a) the linguistic ways to quantify love, (b) the conceptualization of orgasm, and (c) the detailed mappings of the MARRIAGE IS BUSINESS metaphor. This workshop aims to not

only bridge the above research gap in the study of conceptual metaphors, but also provide detailed accounts of these topics from cross-linguistic comparisons.

References: (1) Lakoff, G. and Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (2) Lakoff, G. and Johnson, M. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.

1. How Deep Is Your Love?: A Comparative Study of Metaphorical Quantification of “Love”

LIAO, Yu-Hsuan (National Taiwan University)

This paper examines the strategies employed by English and Mandarin Chinese speakers to metaphorically quantify love. Collocations and co-occurrences of English ‘love’ and Mandarin Chinese ‘愛(love)’ are collected from Corpus of Contemporary American English and corpus from Center for Chinese Linguistics and Academia Sinica Balanced Corpus of Modern Chinese. The data are further analyzed and classified into different groups according to the metaphorical strategies used. These strategies are found to correspond with conventional physical quantities, namely amount of substance, length, time, temperature, intensity, mass, density and area/volume, which are measurements widely adopted in the field of science and technology. This finding indicates how speakers express the intensity of the abstract concept love with the physical properties used to measure concrete substances. The frequency of each strategy is calculated to provide further discussion concerning the similarities and differences between these two languages and possible existing universality and cultural variances.

References: (1) Oster, U. 2010. “Using corpus methodology for semantic and pragmatic analyses: What can corpora tell us about the linguistic expression of emotions?.” *Cognitive Linguistics* 21, No.4. 727-763. (2) Bureau International des Poids et Mesures. 2006. *The International System of Units (SI)* (8th ed.). France: Organisation Intergouvernementale de la Convention du Mètre.

2. Behold, I am Coming Soon!: A Study on the Conceptual Metaphors of Sexual Orgasm in 24 Languages

CHIANG, Yen (National Taiwan University)

This study explores the conceptual metaphors of sexual orgasm in 24 languages. Specifically, the study has identified that the linguistic expressions adopted to refer to and announce an orgasm manifest how speakers of different languages conceptualize orgasm. A total of 24 languages from 8 major language families are collected from interviews with 38 native speakers, and are analyzed qualitatively with concepts drawn from the conceptual metaphor theory. Conceptual metaphors such as ORGASM IS A STATE (OF HAPPINESS), ORGASM IS UP, ORGASM IS HEAT/FIRE, ORGASM IS DEATH, ORGASM IS A DESTINATION, etc. are found in the data. In some languages, orgasm may be conceptualized as a personal physiological/emotional state whereas a majority of the languages view orgasm as a mutual and shared experience between partners. The study concludes that the conceptual metaphors of orgasm may reflect and influence the perception and sexual behaviors of human beings.

References: (1) Deignan, A. 1997. “Metaphors of Desire.” Keith Harvey, and Celia Shalom (eds.). *Language and Desire: Encoding Sex, Romance, and Intimacy*. 21-42. NY: Routledge. (2) Kövecses, Z. 2010. *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

3. MARRIAGE IS BUSINESS: A Corpus Study of Marriage Metaphor in English and Chinese

CHANG, Debbie Yi-Han (National Taiwan University)

The study aims to discuss the MARRIAGE IS BUSINESS metaphor in English and Mandarin Chinese. Linguistic expressions of the MARRIAGE IS BUSINESS metaphor are collected from Corpus of Contemporary American English, corpus from Center for Chinese Linguistics in China, and Academia Sinica Balanced Corpus of Modern Chinese from Taiwan. The results show that although MARRIAGE IS BUSINESS commonly exists in both English and Chinese, the mappings and emphases of the metaphor are different. In English, the focus of MARRIAGE IS BUSINESS is on the cooperative relation as well as

the shared duty between men and women whereas the quality and contribution of a partner and the selection of mate are highlighted in Mandarin Chinese. The study has found that linguistic expressions manifesting MARRIAGE IS BUSINESS metaphor in English and Mandarin Chinese correspond with their etymological development and can provide us a better picture of how etymological uses reflect and influence cultural values.

References: (1) Liu, D. 2002. *Metaphor, Culture, and Worldview: The Case of American English and the Chinese language*. Maryland: University Press of America. (2) Kövecses, Z. 2005. *Metaphor in Culture: Universality and Variation*. Cambridge, UK / New York: Cambridge University Press.

研究発表 (13:30~16:05)

A 会場 [4階 E401] 日本語発表

1. 談話における項の形式とその方略

久好 孝子 (国際医療福祉大学)

本発表の主眼は、話し言葉のみに適応可能と考えられている「単一語彙項の制約」(Du Bois:1987.)という現象に着目し、この制約が日本語の書き言葉に適応可能かどうかを考察するところにある。具体的には、一定量のまとまった書き言葉の談話を抽出して、項位置に現れる指示対象の形式・文法関係・意味属性、そしてその節の述語情報にアノテーションを付与して独自のコーパスを作成する。それを基に、項位置に現れる指示対象の形式とそれに関与する条件を質的・量的に分析し、相関関係を確認する。そして、日本語の書き言葉では「単一語彙項の制約」が有益に機能していることを明らかにする。

参考文献：(1) Du Bois, John W. 1987. "The discourse basis of ergativity." *Language* 63. No.4. 805-855. (2) Fry, John. 2003. *Ellipsis and Wa-marking in Japanese Conversation*, New York/London: Routledge.

2. 日本語の直示述語「V-てくる」の歴史—「行為の方向づけ」を表す用法の発達—

澤田 淳 (青山学院大学)

「V-てくる」の用法の1つに、話者への「行為の方向づけ」を表す用法がある。この用法は次のタイプに下位区分される (澤田 2009)。

- (1) a. ケンが私に本を送ってきた。 (A1 型：物の移送)
- b. ケンが私に本を渡してきた。 (A2 型：物の授与)
- c. ヤクザが私を脅してきた。 (B 型：行為の直接的受影)
- d. 会社が給料を減らしてきた。 (C 型：行為の間接的受影)

森 (2010) によって、近世期以降、A1 型から次第に用法が広がっていった点が明らかになっている。本研究では、さらに、「てくる」標示の義務性に着目し、日本語が話者視点の明示化を強めてきた可能性を夏目漱石『坊っちゃん』の原文版と現代語訳版とのテキスト比較等から指摘する。さらに、韓国語「V 오다」、中国語「V 来」では用法の範囲が A1 型に留まっており、「오다」、「来」の標示も随意的である点を指摘し、対照言語的観点から問題の「V-てくる」の歴史的現象を相対化する。

参考文献: (1) 森勇太. 2010. 「移動を表さない「-てくる」の成立—受益表現「-てくれる」との関連から—」. 『待兼山論叢 文学篇』. 44. 1-16. (2) 澤田淳. 2009. 「移動動詞「来る」の文法化と方向づけ機能—「場所ダイクシス」から「心理的ダイクシス」へ—」. 『語用論研究』. 11. 1-20.

3. 断り発話における程度副詞について—配慮表現としての機能を中心に—

リナ・アリ (筑波大学大学院)

日本語とアラビア語の断りの対照研究を行った結果、両言語には程度副詞の多用が観察された (リナ 2013)。日本語では低い程度を表す「ちょっと」が多用されるが、アラビア語では程度性の高い副詞が好まれる傾向があった。アラビア語では高い程度副詞が好まれる原因が客観的に未だ研究されていない。

本研究では、程度副詞が本来持つ機能以外に聞き手に何らかの配慮を表す派生的機能もあるという可能性に着目し、両言語の程度副詞に対する聞き手の印象を明らかにする。

本研究では、アラビア語母語話者 121 名を対象に意識調査を行った結果、断られたら最も納得できる回答に程度性の高い「gdan」（とても）が含まれる（80%）ことが分かった。日本語では「ちょっと」で配慮を示せるが、アラビア語では「shwya」（ちょっと）を使うと、かえって聞き手に不快な思いをさせる恐れがあると言えよう。

参考文献：(1)リナ アリ. 2013. 「エジプト人大学生と日本人大学生の「依頼」、「勧誘」に対する「断り」の対照研究—ポライトネスと意味公式ストラテジーの観点から—」. 筑波大学人文社会科学研究科国際地域研究専攻修士論文. (2) 山岡政紀・牧原功・小野正樹. 2010. 『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』. 明治書院. (3) Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*, Longman.

4. 三者間の共同作業における言語行動—親疎関係による課題達成および対人関係調整の相互行為— ツオイ・エカテリーナ（東京外国語大学大学院）

本発表は、友人同士と初対面という異なる関係が存在する三者間会話のデータを用い、共同作業における言語行動や、参加者の親疎関係の差により生じる相互行為を分析したものである。分析方法として、本データに共通して見られる談話展開パターンを特定し、全ての発話を「共同作業の言語行動」の観点から分類した。そして、その言語行動を手掛かりに、共同作業において会話参加者の親疎関係により生じる相互行為を検討した。その結果、相互行為には課題達成指向のものおよび対人関係調整指向のものが見られた。友人同士の場合は、話者が対人関係調整指向の相互行為における「コメント」や「検討」の言語行動によって互いに共感を表し、親しい関係に頼りつつ作業に取り組む傾向が見られた。一方、初対面の話者は課題達成指向の相互行為における「推進」や「提案」により作業への参加を試みていた。

参考文献：(1) Fujii, Yoko. 2005. "How Japanese and American pairs co-construct stories: An overview of two different types of collaboration". 『日本女子大学英米文学研究』. 40. 69-84. (2) 熊谷智子・木谷直之. 2010. 『三者面接調査におけるコミュニケーション—相互行為と参加の枠組み—』. くろしお出版.

B 会場 [4 階 E402] 日本語発表

1. 日本人大学生同士の会話にみる重複発話：異ジャンル間比較を通じた機能分析と協調性

竹田 らら（東京電機大学）

本発表は、同一日本人女子大学生同士の重複発話の頻度や機能に関し、異ジャンルの自由対話と課題達成談話を比較する。分析の結果、自由対話は課題達成談話より、ターンあたりの重複発話の総数が多かったが、課題達成談話は自由対話より、同一表現による重複発話やあいづちのない重複発話が多かった。自由対話では、相手の話を軌道に乗せて先に進ませる手助けとして、途中で聞き手からあいづち的な発話が多く出ていた。課題達成談話では、発言内容の共通性が顕著で、同一表現や見解に関する重複発話が少なからずあった。この結果から、自由対話は参与者間の関係性を高めて話を円滑に進め、課題達成談話は命題を作り上げることを示す。以上により、同じ共感を示す重複発話でも、異なる協調性を産み出すディスコースを作る可能性を指摘する。

参考文献：Bateson, G. 1972. "A Theory of Play and Fantasy." In: G. Bateson (ed.) *Steps to an Ecology of Mind: Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution and Epistemology*, 177-193. New Jersey: Jason Aronson.

2. 第二言語話者である子どもへの story-retelling interview test の会話分析：第二言語会話における「記憶」

岡田 悠佑（大阪大学）

本発表は、インターナショナルスクールへの入学試験として英語力と記憶力を測るために行われた 5 歳児への story-retelling interview test での認知活動を会話分析することで第二言語会話における語用論

能力と記憶力の関係、子どもの認知能力を明らかにし、第二言語会話と第二言語話者への新知見を産み出すことを目的とする。分析から、相互行為における記憶力とは、何を語るべきかというインタビュー前の取り決めに参照しつつ、質問が投射する内容を解釈した上で応答によって交渉され構築される相互行為能力であることが分かった。第二言語話者や子どもといったカテゴリーではなく、相互行為の局所で言葉を使って何を成すかという参加者への理解が重要であり、そのためには発話の置かれた連鎖構造としての文脈だけでなく、相互行為の枠組み、相互行為の事前理解を参照することが必要である。

参考文献：(1) Kasper, G. 2009. "Locating Cognition in Second Language Interaction and Learning: Inside the Skull or in Public View?." *International Review of Applied Linguistics* 47. No.1. 11-36. (2) Wootton, J. 2006. "Children's Practices and their Connections with 'Mind'." *Discourse Studies* 8. No.1. 191-198.

3. 習慣を表す英語進行形の事態解釈を動機づけている推論プロセスについて

原田 依子 (東京電機大学)

本発表では、一時的な習慣的行為を表す進行形の用法に焦点を当て、基本的な意味である進行中の動作を表す用法との対比を通して、事態解釈を動機付ける意味要因、およびその推論プロセスを考察する。

二つの用法の意味的な違いの一つに、前者が事態が成立している状態を表すことで、個々の動作を含意するのに対して、後者は進行中の動作を表すことで、事態が成立している状態を含意する点があげられる。ここから、二つの用例は、進行形の基本的な意味である「進行中であること」(Leech & Svartvik, 2002)が、二つの異なる意味レベル(「動作が行われる時点」と「動作が成立する状況の時間的領域」)に適用された結果導き出されると仮定することができる。しかし実際には、動詞のアスペクト解釈とそれに伴う時間把握が、直接事態解釈に結びつくわけではなく、それらの意味要素が「起点」となって、基本的用法とのシネクドキシの関係を基にした類推により、用法が派生することを示す。

参考文献：(1) 佐藤信夫. 1992. 『レトリック感覚』. 講談社. (2) Leech, G. & J. Svartvik. 2002. *A Communicative Grammar of English*. Longman.

4. considering の前置詞・接続詞用法の共時的研究 ―レジスターの観点から―

林 智昭 (京都大学大学院)

considering, during, notwithstanding などの現象は、通時的に動詞に由来する「動詞派生前置詞 (deverbal prepositions)」(秋元 2002, 安藤 2005, Fukaya 1997) の一例として、文法化 (grammaticalization) 研究の領域において論じられてきた。本発表の目的は、considering の前置詞的用法と接続詞的用法の分布の違いにみられる特徴を、レジスターとの関係からコーパスを用いて実証的に調査することである。具体的には、BNC より収集した 154 の用例の品詞的振る舞いを分類し、ジャンルごとに集計することによって、共時的観点から考察を行う。結論として、他の動詞派生前置詞を論じた先行研究の記述と同様に、considering についても、その文体論的な特徴が「書き言葉的」であるということを指摘し、用法の分布とジャンルの間にみられる相関の一端を明らかにする。

参考文献：(1) 秋元実治. 2002. 『文法化とイディオム化』. 東京. (2) 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』. 東京. (3) Fukaya, Teruhiko. 1997. "The Emergence of -ing Prepositions in English: A Corpus-Based Study." *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of his Eightieth Birthday*. 285-300.

C 会場 [4 階 E403] 日本語発表

1. 普通体／丁寧体世界の規範が授受補助動詞テクレル／テモラウの選択に与える影響

京野 千穂 (名古屋大学大学院)

授受補助動詞テモラウとテクレルは恩恵を受けた経験を叙述し、基本的に受け手からの働きかけの有無で使い分けられるとされる。本研究は、感謝を述べる際の使い分け(「助けてくれて／もらってありがとう」)に着目し、母語話者の使用を分析した。その結果、働きかけは影響せず、親しさと気遣いの有無で使い分けられていた。テクレルは受け手の喜びを親しい相手に伝えるが、テモラウは「距離に関わら

ず」与え手の負担を気遣う表現だと分かった。負担は距離がある程、認識されやすいが、親しくても負担への認識が伴えばテモラウが使用された。上記は、叙述文と対者場面で意味が変化し、テクレルの後件が普通体、テモラウは丁寧体となる傾向を説明する。恩恵享受に際し、自己の喜びより他者の負担／迷惑に注視する日本語話者の傾向とテモラウの文法化の関連性も論じる。

参考文献：(1) Coulmas. 1981. *Conversational Routine Exploration in Standardized Communication Situations and Prepatterned Speech*. The Hague. (2) 鈴木. 1997. 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」. 田窪(編). 『視点と言語行動』. 45-76. 東京.

2. 中国人日本語学習者の「不同意」行為 ―ヘッジ使用における母語転移の可能性―

堀田 智子 (東北大学大学院)

本研究は、円滑なコミュニケーションの重要なストラテジーの「ヘッジ」に焦点をあて、中国人日本語学習者（以下、CJ）が「不同意」行為で使用するヘッジの特性および母語転移の有無を探った。分析の結果、以下4点が明らかになった：(1) 使用率は、日本語母語話者（以下、JJ）で統計的に有意に高く、CJで有意に低い、(2) 統語的操作を伴う疑問ヘッジは、JJで統計的に有意に高く、中国語母語話者（以下、CC）で有意に低い、(3) CJとCCは、JJが多用する否定疑問の使用頻度が低い、(4) 思考を示す「思う」や「觉得（思う）」などの叙述ヘッジは、母語を問わず多用される。以上から、「不同意」行為でのCJのヘッジは、JJに比べ限定的で、特に疑問ヘッジは母語からの負の転移が生じるため、使用が困難なことが明らかになった。本結果は、ヘッジを日本語教育現場で指導する必要性を示唆する。

参考文献：(1) Brown, P., and Levinson, S.C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (2) Fraser, B. 2010. "Pragmatic competence: The Case of Hedging." In: Kaltenbock G. et al. (Eds.). *New Approaches to Hedging (Studies in Pragmatics)*. 15-34. Bingley: Emerald Group.

3. 付加的従属化のマーカー「みたいな」の統語語用論的分析

劉 曉萃 (北海道大学大学院)

本発表は、発話の文末に用いられている「みたいな」について、従属化のマーカーとしての付加的な性質を確認したのちに、文末の用法を整理し、その使用動機を解明することを目指す。具体的に、まずKato (2014) の付加による従属化の観点を参考し、典型的な従属化と比較しながら、「A みたいな Ø」で現れる連体修飾節を従属化の一種と位置づけ、「引用による従属化」と見なす。そして、「A」が誰かのセリフとして考えられるかどうかによって、「A みたいな Ø」の用法を「引用」と「先行発話の補足」の二つに分けて考える。最後に、社会語用論的観点から、「みたいな」の付加には、表現を多様化にするという正の動機と、話者交替における緊張感の回避及び断言回避という負の動機があることを明確にする。

参考文献：Kato, Shigehiro. 2014. "Insubordination types in Japanese - What facilitates them? -". *Asian and African Languages and Linguistics*. 8. 9-30.

4. 「ノ(ダ)ね」の語用論的機能 ―具現化形式と音調の観点から―

市村 葉子 (名古屋大学大学院)

本研究は、名大会話コーパス（主に女性の自然会話）を用いて「ノ（ダ）ね」の語用論的機能を考察した。調査は本コーパスで観察された具現化形式を抽出し、それらを「情報提示」「情報受容」に分類した。その後、会話例の読み上げ実験を行い、「ね」の音調と発話意図の関係を分析した。「のね」は年齢に関わらず「情報提示」（疑問上昇、アクセント上昇）、「んだね」は主に30代以下で観察され、「情報受容」（「確認」は疑問上昇、アクセント上昇、「非確認」はアクセント上昇、平坦）として使用される傾向にあった。若い女性の話し言葉では「ノ（ダ）ね」は「の（説明のノダ）」及び「んだ（発見のノダ）」に「ね（会話を継続させる標識）」が付加された形式で、母語話者は「ノダ」の具現化形式と「ね」の音調により、相手に談話展開の担い手、または聞き手という立場を明示化している可能性が示された。

参考文献：(1) 轟木靖子. 2008. 「東京語の終助詞の音調と機能の対応について－内省による考察－」. 『音声言語』 VI. 5-28. 近畿音声言語研究会. (2) 名嶋義直. 2007. 『ノダの意味・機能－関連性理論の観点から－ (日本語研究叢書 19)』. くろしお出版. (3) 日本語記述文法研究会(編). 2003. 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』. くろしお出版.

D 会場 [4 階 E404] ①② English Presentations ③④ 日本語発表

1. Reconsidering the Validity of Examining Constituent Order in terms of Information Status of Constituents

YAMADA, Yoko (Niigata University)

Constituent order has been examined in terms of several factors. One trend of research has examined constituent order in terms of information status of constituents. The ordering of main and *as*-clauses expressing reasons (henceforth, *as*-clauses) has been examined in a similar vein: the tendency of *as*-clauses preceding the main clause is related to their information status (i.e. given information) (e.g. Diessel 2005). However, previous studies are problematic in three respects. Firstly, it is not clear which definition of given information is used in examining the information status of *as*-clauses. Secondly, information status of *as*-clauses varies, depending on the definitions used. Thirdly, it is questionable whether *as*-clauses tend to precede the main clause. This study applies Prince's (1992) notion of given information to *as*-clauses, and reconsiders the validity of examining the ordering of main and subordinate clauses in terms of information status of clauses.

References: (1) Diessel, H. 2005. "Competing Motivations for the Ordering of Main and Adverbial Clauses." *Linguistics* 43. No.3. 449-470. (2) Prince, E. F. 1992. "The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information-status." In: W. C. Mann and S. A. Thompson (eds.). *Discourse Description*. 295-325. Amsterdam: John Benjamins.

2. On the Negative Use of the Japanese Intensifier *totemo* 'very'

SAWADA, Osamu (Mie University)

The Japanese intensifier *totemo* 'very' can intensify the degree of a gradable predicate. However, *totemo* can also intensify a "negative" modal statement. What is puzzling about the negative *totemo* is that, unlike regular emphatic negative polarity items (NPIs), such as *an inch* and *the least bit*, (i) the negative *totemo* cannot be within the scope of negation, and (ii) it denotes a high rather than low scalar value. I argue that the negative *totemo* is not a logical NPI, which is licensed by negation. Rather, it is an expressive that intensifies the unlikelihood or impossibility of a given proposition and refuses to update the common ground with the at-issue proposition. It will be shown that the pragmatic function of refusal forces the at-issue proposition to occur in a negative environment. This paper shows that there are polarity-sensitive expressions whose distributions are restricted by their pragmatic functions.

References: (1) Stalnaker, R. 1978. "Assertion." In: Cole, P (ed.). *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*. 315-332. New York. (2) Portner, P. 2009. *Modality*. Oxford. (3) Potts, C. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford.

3. 聞き手が知らない人物の名前披露－日本語会話における有標な指示－

須賀 あゆみ (奈良女子大学)

本発表では、日常会話で話者が自身の経験を語るとき、聞き手が知らない人物の「名前」を後続指示位置で言及する行為（以下「名前披露」と呼ぶ）に注目する。そして、聞き手が知らない人物は「描写」の形式で会話に導入され、照応形で再指示されるという無標の現象がある一方で、なぜ聞き手が同定できない人物の「名前」が後続指示位置というタイミングで披露されるのかという問題を提起する。名前披露は敬称等を含む呼称の形式を伴って行われるため、対象人物があるカテゴリーの一成員であるということだけでなく、「名前」の話者との個人としての関係を指標するという点で、導入時の「描写」が果たす役割を補強する役割を担っている。その役割を発揮するのにより効果的な語りの結末に近い位置で

名前披露が行われると考えられる。本発表は、有標な指示が単なる照応以上の役割を果たすという Schegloff (1996) の主張を例証するものである。

参考文献：(1) Fox, B. A. 1987. *Discourse Structure and Anaphora: Written and Conversational English*. Cambridge: Cambridge University Press. (2) Schegloff, E. A. 1996. "Some Practices for Referring to Persons in Talk-in-Interaction: A Partial Sketch of a Systematics." In: B. A. Fox (ed.) *Studies in Anaphora*. 437-485. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

4. 諷喩とは何か：談話分析的レトリック研究の試み

平川 裕己 (神戸市外国語大学大学院)

本論は、これまでおおまかにしか理解されていなかった諷喩という概念を、談話分析的な観点から明瞭に捉えなおすことを目的とする。

諷喩は、話し手が伝えようとすることから (target) を、別のことから (source) との構造的な対応関係を示すことで伝達するレトリックである。従来の諷喩研究では、語りの形式をもつ書かれた「モノ」としてのテキストに関心が限定されてきた。また、それらの諷喩テキストは内容やトピックによって特徴づけられるのみで、互いの関連は十分に示されていない。

本論は、諷喩が対話においても産出されることを指摘し、そこで明示的に観察される「聞き手の説得」を軸として諷喩を分類しなおす。この分類により、先行研究の抱える問題を解決し、多様な諷喩を相互に関連づけて整理することができる。本論では、さらに、諷喩について用いた考察の方法が、レトリック研究の方法論的可能性を胚胎していることも示したい。

参考文献：(1) 佐藤信夫. 1992[1981]. 『レトリック認識』(講談社学術文庫版). 東京: 講談社. (2) Labov, William. 1972. "The transformation of experience in narrative syntax." In: *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*. 359-396. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

E 会場 [4 階 E405] English Presentations

1. The Pragmatics of Intelligible Pronunciation in English as a Lingua Franca in Japan

O'NEAL, George (Niigata University)

This study investigates how phonology is used for pragmatics, i.e. how people use language to be understood. English as a Lingua Franca is the most common type of English in the world, which is defined as any English usage as the communicative medium of choice among people from different first language backgrounds, (Seidlhofer 2011). Research has identified aspects of pronunciation that contribute more to intelligible pronunciation (Jenkins 2000; Osimk 2009; Matsumoto 2011; Deterding 2013; O'Neal in press). However, there is little research on the pragmatics of intelligible pronunciation (however, see Matsumoto 2011). That is, what do speakers of English as a Lingua Franca do once they have identified a pronunciation as unintelligible? This presentation argues that the modification of pronunciation is one pragmatic strategy with which such speakers restore mutual understanding after a miscommunication.

References: (1) Deterding, David. 2013. *Misunderstandings in English as a Lingua Franca*. Berlin: Walter de Gruyter. (2) Jenkins, Jennifer. 2000. *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press. (3) Matsumoto, Yumi. 2011. "Successful ELF communications and implications for ELT: Sequential analysis of ELF pronunciation negotiation strategies." *The Modern Language Journal* 95. 97-114. (4) O'Neal, George. (in press). "Consonant Clusters & Intelligibility in English as a Lingua Franca in Japan: Phonological Modifications to Restore Intelligibility in ELF." *Journal of Pragmatics and Society*. (5) Osimk, Ruth. 2009. "Decoding sounds: An experimental approach to intelligibility in ELF." *View[z]* 18. No.1. 64-91. (6) Seidlhofer, Barbara. 2011. *Understanding English as a Lingua Franca*. Oxford: Oxford University Press.

2. Analyzing the Pragmatic Force of Sentence Final Particles as a Function of Actual Use

KROO, Judit (Stanford University)

Previous studies have categorized Japanese sentence final particles (SFPs) from more to less dominant, with 'dominant' SFPs acquiring 'masculine' social meanings by indirectly indexing characteristics associated with masculinity. This study reexamines use of SFPs in scripted and naturally occurring data, and demonstrates that such gendered characterizations may no longer be relevant with respect to variation in SFP use although they continue to be salient for stereotypical male/female representations. This study proposes alternative characterizations of the social meaning and pragmatic force of SFPs based on e.g. assertiveness or formality. Using both quantitative and qualitative analyses, this study considers which factors may be perceptually salient with respect to SFP variation and proposes a pragmatic account of SFPs based on such variation. Considering variation patterns across a variety of genres, the present paper demonstrates how sociolinguistically derived data can act as a guide for modeling pragmatic analyses.

References: (1) Matsumoto, Yoshiko. 1996. "Does less feminine speech in Japanese mean less femininity." (2) Maynard, Senko. 1993. *Discourse modality: subjectivity, emotion and voice in the Japanese language*. (3) Miyazaki, Ayumi. 2004. "Japanese junior high school girls' and boys' first-person pronoun use and their social world." (4) Mizumoto, M. 2001. "Terebi drama ni okeru josei kotoba to jendaa."

3. Demonstratives and Deictic Shift in Narrative

SUGIYAMA, Sayaka (no affiliation)

This presentation analyzes functions of demonstrative descriptions in an English fictional narrative, "The Wonderful Wizard of Oz". There are two purposes of this study. The first purpose is to show the distribution of demonstratives and to give an explanation based on the framework of Deictic Shift Theory (DST) (Duchan, Bruder, and Hewitt 1995), which insists that when we are absorbed in a story, the Deictic Center (person, place, and time) (cf. Bühler. 1982) is shifted. This study insists that demonstratives in narrative parts structure a story providing readers with a cognitive stance on mental representations. There are two findings: (1) demonstratives are often used in the beginning part of deictic shifts; (2) other demonstratives refer to entities which are salient in a given scenario. The second purpose is to give a pragmatic account of these findings referring to previous analyses of demonstratives (Givón 1983, Gundel et al. 1993, Wolter 2006)

References: (1) Bühler. 1982. "The Deictic Field of Deictic Words." (2) Gundel, et al. 1993. "Cognitive status and the form of referring expressions in discourse." (3) Duchan, Bruder, and Hewitt. (eds.) 1995. *Deixis in narrative*. (4) Wolter. 2006. *That's that: the semantics and pragmatics of demonstrative noun phrases*.

4. *Gaikokujin ja arimasen* (I'm not a foreigner): An Analysis of the Interactive Construction and Contestation of (not) Being a Foreigner

BUSHNELL, Cade (University of Tsukuba)

Participants of talk-in-interaction may make categories and collections of categories relevant to their talk. From an ethnomethodological perspective, such categories are understood as being assembled by the participants on a moment to moment basis as they co-construct their interaction. In the present research, I examine a service encounter between a Caucasian Japanese national and the racially Japanese staff of a public bath house in Japan. I use conversation analysis and membership categorization analysis to examine the specific ways in which the participants co-construct the categories of *Japanese* and *foreigner*, how they constitute the category *Japanese* as being bound to differential sets of attributes, rights, legal statuses, and so forth, and how they treat these mutually different categorical constitutions as being problematic for assembling the real-world activity of using the bath house facilities. I also consider how the participants make the interaction visible as being a dispute.

References: (1) Sacks, H. 1992. *Lectures on Conversation*. Blackwell: Cambridge. (2) Hester, S. & P. Eglin. 1997. "Membership Categorization Analysis: An Introduction." In: S. Hester & P. Eglin (Eds.). *Culture in*

基調講演 (16:15~17:45) [3階 ND ホール]

Explaining Pragmatic Impairment: Finding the Best Fit between Pragmatic Theory and Clinical Data

Michael PERKINS (University of Sheffield)

In this talk I will consider two contrasting approaches to the study of pragmatic impairment. The first, which one might call *Reduce and Refine*, sees atypical pragmatic behaviour as the external manifestation of some underlying deficit, typically described in neurological and/or cognitive terms, which it aims to characterise using constructs from pragmatic theory. It is theory-driven, top-down, stipulative and ecologically neutral. The second approach – let us call it *Look and Learn* – places primary emphasis on detailed observation and analysis of the atypical behaviour itself, and in its own terms, and sees the *ab initio* application of constructs from pragmatic theory as premature and potentially distorting. It is data-driven, bottom-up, heuristic and ecologically sensitive. I will examine both approaches using clinical data, and argue that they should ultimately be seen as complementary rather than as rivals. I also aim to show more generally how mainstream pragmatics can benefit from the study of pragmatic impairment.

11月30日 (日曜日)

研究発表 (9:30~11:25)

A 会場 [4階 E401] 日本語発表

1. 現代日本語におけるメタファー表現としての「風」の考察—なぜ「先輩風」は吹くのか?—

松浦 光 (名古屋大学大学院)

本発表では、Lakoff and Johnson (1980) の概念メタファーの観点から、メタファー表現としての「風」の言語概念上の構成要素を「方向」・「力」と想定し、実際の用例を考察する。「方向」には、前/後・上/下、「力」には、強/弱が存在する。そこから、「風」のメタファー表現としての動機づけを考察する。「先輩風」は、人間を気象現象の発生源と捉えることにより生まれる。このメタファー表現は、上から下への「方向」、目に見えない影響である「力」により構成される。但し、「風」は、気圧の高いところから低いところに吹くように、「先輩風」も同様に社会的に上の人間から社会的に下の人間に吹く。従って、社会的に下位の人間からは、社会的に上位の人間に、この意味での「風」を吹かせることはできない。これらの性質が「風」のメタファー的意味の実現にも影響を与えている。

参考文献：(1) 鍋島弘治朗. 2011. 『日本語のメタファー』. くろしお出版. (2) 杉山洋介. 2006. 『日本語は人間をどう見ているか』. 研究社. (3) Lakoff, George and Johnson, Mark. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.

2. メタファーと発話の連鎖 —「枠組み」設定としてのメタファー表現—

杉本 巧 (広島国際大学)・鍋島 弘治朗 (関西大学)

本研究は、認知メタファー理論の立場から、対話のトピック開始部のメタファー表現による「枠組み」設定を論じる。テレビのインタビュー番組における対話をデータとし、トピック開始部に現れたメタファー表現前後の「たとえ」を明示する形式や発話継続を示す形式、それに対する対話参加者のうなずき

や発話継続を促す形式といった連鎖環境、後の対話展開でのメタファー表現のつながり等について、会話分析の手法を取り入れて分析した。その結果、トピック開始部のメタファー表現により、対話展開に先駆けてメタファーに基づく思考及び表現の「枠組み」が設定され、それに基づき参加者が主観的、抽象的な内容について一貫性のある表現で対話し、理解を共有していることがわかった。本研究は、対話におけるメタファーの動的な機能の一端を明らかにするものである。

参考文献：Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press. (2) Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. 1974. "A Simplest System for Organization of Turn-Taking in Conversation." *Language* 50. 696-735. (3) Semino, E. 2008. *Metaphor in Discourse*. Cambridge University Press.

B 会場 [4 階 E402] 日本語発表

1. 英語の名詞派生形容詞に見られる比喩的意味の前景化

田丸 歩実 (京都大学大学院)

本発表では、英語の名詞派生形容詞 (N+y 接辞: ex. *foxy, sugary, silky, etc.*) に注目し、品詞転換によって比喩的意味が前景化されることを論じる。名詞表現の場合、比喩的意味は基本的にコンテキストに依存するが、形容詞化することで字義の意味との曖昧性が解消され、比喩として解釈されるようになることを示す。このとき、元の名詞が属する意味クラスによって、比喩拡張の基盤となる類似性に一定の傾向が見られることを、＜動物＞、＜食べ物＞、＜羽毛＞という3つの意味クラスを例に観察する。さらに、比喩的意味が文法的にコード化されるという分析結果に対し、形容詞というクラスが持つ「主観性・評価性」という特徴から説明を試みる。これまでの認知言語学のメタファー研究では、個々の表現よりも心的写像の性質と構造が重視されたが、本発表は具体的なメタファー表現の文法的傾向に焦点を当てたものと言える。

参考文献：(1) Deignan, Alice. 2005. *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins. (2) Holyoak, Keith J. and Paul Thagard. 1995. *Mental Leaps: Analogy in Creative Thought*. MIT Press. (3) Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

2. 文章理解のメカニズムの解明にむけて 一括弧の曖昧性はどのように解消されるかー

黒田 一平 (京都大学大学院)

「東京大学 (東大)」や「イチロー (マリナーズ)」のような一括弧を用いた表現は、母語話者ならば容易に理解することが可能である。しかし、一括弧の外側要素と内側要素の関係は、正式名称と略称、選手と所属団体などのように様々であり、実際には曖昧性が存在する。よって、母語話者は何らかの語用論的推論を用いて両者の関係を解釈していると考えられる。そこで本発表では、認知言語学の立場から考察を行い、両者の関係は内側要素と外側要素が読み手の概念構造においてどのメンタル・スペースあるいは認知領域に位置付けられるかという観点によって記述・分析が可能であることを示す。具体的には、一括弧表現の曖昧性は、(i) 外側要素がどのようにカテゴリー化されるか、(ii) 外側要素を特徴づけるベース、あるいは外側要素が導入するスペースに対して、内側要素がどこにカテゴリー化されるかによって解消されるという主張を行う。

参考文献：(1) 木村大治. 2011. 『一括弧の意味論』. 東京: NTT 出版. (2) 山森良枝. 2014. 「『語用論的一括弧』について」. 『第8回日本語実用言語国際会議 CONFERENCE HANDBOOK』. 116-119. (3) 久光徹・丹羽芳樹. 1997. 「統計量とルールを組み合わせる有用な一括弧表現を抽出する手法」. 『自然言語処理学会研究報告』NL-122-17. 113-118.

3. 「ほめごろし」の言語学

大久保 朝憲 (関西大学)

本発表は、誇張された賛辞によって、意図的にその賛辞の対象を痛烈に攻撃することをねらって展開

される「ほめごろし」のディスコースについて、フランスの発話理論である「論証的ポリフォニー理論」にもとづいた分析をこころみるものである。「ほめごろし」のディスコースには、その全体もしくは一部にアイロニー発話がふくまれ、典型的には、そのアイロニー的解釈をうながす言語的誘因が提示されている。しかしながら、この言語的誘因は、それとすぐに了解されないばかりもあり、そのために、「ほめごろし」が話者の意図どおりに理解されないケースもある。上記理論で提案される、発話に付与された「トーン」と「発話機能」の概念をもちいて、こうした現象についても有効な記述をあたえ、「ほめごろし」のディスコースの特徴を整理したい。

参考文献：(1) Carel, Marion. 2011. *L'Entrelacement argumentatif. Lexique, discours et blocs sémantiques*. Paris : Éditions Honoré Champion. (2) Okubo, Tomonori. (in press). "Irony by two theoretical frameworks: Relevance theory and Argumentative polyphony theory." In: Arigne, V. (ed.), *Metalinguistic Discourses*. Cambridge: Cambridge Scholars Publishing.

C 会場 [4 階 E403] 日本語発表

1. 多読用教材としての英語母語話者向け絵本における結束性と直示性 : 文部科学省検定教科書との比較

大槻 きょう子 (広島修道大学)

近年、脚光を浴びている多読指導で重宝されている教材に英語母語話者用絵本がある。本発表ではこの英語母語話者向け絵本（ここでは Oxford Reading Tree シリーズ（以下 ORT））と文科省検定教科書にある英語を比較し、代名詞等の基本的文法項目の導入方法の違いをコンテキストの果たす役割に焦点を当てて分析検討する。特に、結束性と直示というテキストの性格を決定づける基本的要素について Halliday and Hasan (1976) の観点から精査する。結束性については、普通名詞・固有名詞が指示詞・三人称代名詞とともに指示の連鎖を形成するパターンを両テキストで比較する。また、直示性の観点からこれらの項目について分析し、this, that, it の導入法について使用頻度や指示対象物の違いを報告する。分析の結果、検定教科書と ORT では話者（登場人物）と聞き手（学習者）の間のコンテキストの共有の点から大きな違いが見られることを明らかにする。

参考文献：Halliday, M.A.K., and Hasan, R. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.

2. 語用論的観点に基づく高等学校英語教科書の分析：「英語表現Ⅰ」の事例を中心に

水島 梨紗 (札幌学院大学)

外国語教育の目標としてコミュニケーション能力の養成が謳われるようになって久しいが、中間言語用論の分野では依然として学習者の語用論的能力の不足が指摘されている。この問題の一端を探るべく、本研究は日本の高等学校で使用されている「英語表現Ⅰ」の教科書 8 冊を対象とした分析を行い、「明確かつ多様なコンテキストが示されているか」、「学習指導要領の挙げる言語機能がカバーされているか」、「ポライトネスの概念に照らして適切な言語形式が選ばれているか」、「発話単体だけでなく談話レベルでのストラテジーが意識されているか」、「メタ語用論的な解説が明記されているか」等の観点からその内容を評価した。分析の結果、教科書の間でばらつきはあるものの、すべての要素を十分に満たしたものはなく、多くの面で改善の余地が残されていることが明らかになった。本研究発表では、上記調査の報告とともに、具体的な改善策を含む新たな提言を行う。

参考文献：Shimizu, T, Fukasawa, E., & Yonekura, S. 2007. "Introductions and practices of speech acts in Oral Communication 1 textbooks: From the viewpoint of interlanguage pragmatics." *Sophia Linguistica* 55. 143-163.

3. 政治的イデオロギーはどのように表象されるのか？—チョムスキーと福島親子との会談—

藤本 大樹 (名古屋大学大学院)

チョムスキーの言説では、「前置き」、「過去のイベント描写」、「コメント」、「提言」という 4 分割され

たナラティブ構造が観察できる。本発表では、チョムスキーの言説に注目し、過去のイベント描写が、提言者－相談者という文脈でどのように導入されるか、その後にそれからどう抜け出し、提言者としての助言につなげるか、という点を考察する。また、批判的談話分析の観点から、チョムスキーの言説は、福島親子に助言しながら、不正を許している社会構造や社会秩序への批判というイデオロギーを表していることがわかる。政府は市民に対して嘘の情報を与え、法律や政策は政府を守るためのものだという事実性を疑う余地のない必然的な現実とみなして前提としており、チョムスキーの言説はイデオロギー的機能を果たしている点を明らかにする。

参考文献：(1) Bhatia, Aditi. 2006. "Critical discourse analysis of political press conferences." *Discourse & Society* 17. 173-203. (2) Eco, Umberto. 1984. *Semiotics and the Philosophy of Language*. Indiana University Press. (3) Fairclough, Isabela & Fairclough, Norman. 2012. *Political Discourse Analysis*. Routledge.

D 会場 [4 階 E404] English Presentations

1. The Difference between "Otaku" and "Geek" in English: A Frame Semantics Analysis

FIGUEIRO TEIXEIRA, Lilian (Keio University)

This research shows that "otaku" and "geek" in English are different concepts related to the cultures in which they originated. In order to demonstrate this, I present the result of a semantic analysis of the uses of the words "otaku" and "geek" in English texts, through the application of the frame semantics (Fillmore 1982). The occurrences analyzed were extracted from newspaper articles (*Japan Today* and *The Japan Times*), and from the enTenTen12 corpus, available through the Sketch Engine website (Kilgarriff, Adam, et al. 2014). As a result, both words can evoke the INTEREST frame (*train otaku, word game geeks*), but "otaku" has also another meaning related to the unusual way they interact, the SOCIAL_INTERACTION frame (*otaku get married to electronic lover*), which could not be found in the occurrences of "geek". Instead, only "geek" can evoke the EXPERTISE frame.

References: (1) Fillmore, C. 1982. "Frame Semantics." In: *Linguistics in the Morning Calm*. Linguistic Society of Korea. 111-137. Seoul: Hanshin Publishing Company. (2) Kilgarriff, Adam, et al. 2014. "The Sketch Engine: ten years on." *Lexicography*. 1-30. Available at: <<http://www.sketchengine.co.uk>>.

2. Gender and Politeness on Conversational Styles in Intercultural Communication

ITAKURA, Hiroko (Hong Kong Baptist University)

This paper focuses on the little-known research area of gender and politeness in intercultural communication by addressing the question of whether Asian and Western men modify (or maintain) "masculine" conversational styles during L2 English intercultural conversations.

The paper reports a case study of naturalistic L2 English conversations between a Hong Kong Chinese male speaker and a Swedish male speaker and discusses the possibility that masculine conversational styles may become "feminised" than is generally believed. In addition, Asian men's style may undergo feminization to a greater extent than Western men due to the transfer of "Asian" norms of politeness including emphasis on modesty and avoidance of self-praise.

The paper discusses contextual specifics that may account for modifications in masculine speech styles as well as analytical methods for investigating gender and conversation. Implications are also discussed for future research in the interface between gender and politeness in intercultural communication.

References: (1) Leech, Geoffrey. 2007. "Politeness: Is there an East-West divide?" *Journal of Politeness Research: Language, Behavior, Culture*. 3. 167-206. (2) Eckert, Penelope, & Sally McConnell-Ginet. 2013. *Language and gender* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.

3. Exploring the Illocutionary Force of Words Versus Images in Multi-Modal Texts

McDONALD, Peter (J. F. Oberlin University)

This study combines speech act theory (Searle, 1969; Dresner & Herring, 2010) with semiotic research,

(Halliday & Matthiessen, 2004; Kress & Van Leeuwen, 2006), to analyze the communicative role of images and the communicative role of words in conveying meaning in multi-modal texts. It presents research findings that suggest in the majority of texts, both traditional alphabet-rich texts such as novels and modern image-rich texts such as web pages, it is the words rather than the images that carry the illocutionary force of the text. This study suggests that these findings challenge some of our assumptions about how images and words convey meaning in texts and discusses the implications of these findings for teaching and researching multi-modal texts in educational contexts that utilize pragmatics.

References: (1) Dresner, E. & Herring, C. 2010. "Functions of the Nonverbal in CMC: Emoticons and Illocutionary Force." *Communication Theory*. 20. 249-268. (2) Halliday, M.A.K. & Matthiessen, C.M.I.M. 2004. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Hodder and Arnold. (3) Kress, G. & Van Leeuwen, T. 2006. *Reading Images*. London: Routledge. (4) Searle, J.R. 1969. *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge: CUP.

E 会場 [4 階 E405] English Presentations

1. Designed Silences: A Study of Silences in Talk in Interaction

BHATTA, Baikuntha (Kanagawa University)

Silence in conversation is basically understood as time in interaction when no participants take a turn. Sacks, Schegloff, and Jefferson (1974) discuss the organization of turn-taking in conversation in which silence occurs when no participants are selected. Pomerantz (1984) discussed silence as the other participants' unwillingness, uncertainty, or disagreement with the ongoing interaction. In a different study, Jefferson (1988) examined the occurrences of silences and found that silences longer than one second are understood as trouble-initiative and so are generally filled in with non-verbal activities. However, this phenomenon also occurs in institutional contexts is still a matter that calls for further examination.

This presentation focuses on the occurrences of silences in different institutional contexts – news interview, and classroom interaction – and attempts to highlight similarities (or differences) between those contexts and mundane interaction. How and why the participants design silences is the most focal aspect of this presentation.

References: (1) Jefferson, G. 1988. "Notes on a possible metric which provides for a 'standard maximum' silence of approximately one second in conversation." In: D. Roger and P. Bull (Eds.). *Conversation: An interdisciplinary perspective*. 166-196. Clevedon, UK: Multilingual Matters. (2) Pomerantz, A. 1984. "Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes." In: J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action*. 57-101. Cambridge: Cambridge University Press. (3) Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. 1974. "A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation." *Language* 50. 696-735.

2. When Not Talking is 'Talking': The Functions of Silence

HUI, Jon S. Y. (The University of Hong Kong)

Analyzing material drawn from a corpus of over one hundred telephone conversations mainly between native English speakers recorded in a customer service centre, this paper identifies the various functions of silence in these workplace interactions. Focusing on the detail of the interactional exchanges between the customer service representatives and their customers, I use a number of authentic examples to illustrate the functions of silence, among other communication strategies employed by the participants. Two very different outcomes are identified. Silence can be interpreted as a power-asserting device when uncooperative turn-taking is evident. In other contexts, silence can indicate cooperation when listening to customers' complaints. It seems that this linguistic phenomenon cannot be defined in absolute terms. The presence of silence is a result of ongoing negotiation between speakers and its functions and implications are often significant.

Reference: Jaworski, A. 1993. *The power of silence: Social and pragmatic perspectives*. Newbury Park, California: Sage.

ポスター発表 (A) 11:25~12:25 (B) 12:25~13:25 [3階大講義室]

A1. Semantic-pragmatic Analysis of Japanese Case Markers 'Wo' and 'De'

CHEE SIONG, Lee (Graduate School of Foreign Languages, Sapporo University)

The case markers 'wo' and 'de' have seeming commonality in designating a space, but the cognitive mechanisms, on which the respective case markers are based, are quite different. I argue that the basic meaning of 'wo' is to specify the target entity of the action a verb designates, and the construal of the entity as a thing or a space reflects the human ability of distal/proximal construal. I claim that the basic usage of 'de' is to specify the location that a thing or an event occupies, and other uses are extended depending on the principle of "domain centrality" in Cognitive Grammar. I argue that entity marked by 'de' functions as a supporting element to fulfill the main event, and the acceptability depends on whether it evokes a specific implication or a pragmatic inference from a given discourse.

References: (1) Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press. (2) Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (3) Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. The University of Chicago Press. (4) Oka, Tomoyuki. 2013. *Basho no Gengogaku*. Hituji Syobo. (5) Shin, Moriyama. 2008. *Ninchi gengogaku kara mita nihongo kakujoshi no imi kozo to shutoku*. Hituji Syobo.

A2. Men and Women Interact Differently: Analyses of Compliments among Gender in Japanese Conversation

FUJIMURA-WILSON, Kayo (Yamaguchi University)

This study examines the use of compliments among gender in Japanese conversation. Compliments are used when speakers praise people and make people feel good in conversation. Compliments and their responses were collected from twenty-one informal conversations including men and women.

There were similarities and differences in using compliments among gender, and the different speech style between men and women has been observed. Firstly, although both genders used compliments at a similar frequency to each other, women tend to give compliments indirectly to a third person whereas men tend to give compliments directly to an addressee. Secondly, men and women differ in conversational interests and praise different objects. Thirdly, in compliment responses, both genders often use deflection when they receive compliments, however, no men rejected their compliment. Women tend to cooperatively agree with compliments given to a third person.

References: (1) Herbert, R. K. 1990. "Sex-Based Differences in Compliment Behavior." *Language in Society* 19. 201-224. (2) Holmes, J. 1988. "Paying Compliments: A Sex-Preferential Politeness Strategy." *Journal of Pragmatics* 12. 445-465. (3) Rees-Miller, J. 2011. "Compliments Revisited: Contemporary Compliments and Gender." *Journal of Pragmatics* 43. 2673-2688.

A3. 自己肯定感を育む通級指導学級での実践

石坂 光敏 (東京学芸大学大学院)・権 明愛 (十文字学園女子大学)

文部科学省の全国調査によれば、6.5%の児童生徒に発達障害の可能性があるとされているが、実質的には、約1割の児童が何らかの支援が必要と思われる。X市A通級には、主に語用論的コミュニケーションの課題からトラブルを起こし、結果的に二次障害を併発し通常学級での適応が難しくなった児童たちが通っている。そこでは、療育的なかわりに焦点を置いた指導を行っているが、快適に過ごせるような学習環境下で、発達の偏りに寄り添って気持ちの受容・共感をしながら、教員の願いを伝える指示の出し方(アイメッセージ)を基本に、自己肯定感につながるような褒め方、意思表示の見本の教示等、短く分かりやすい言葉かけでの支援を行っている。本稿では、これらの支援により、まず教員との良好な信頼関係の中で心の基盤を形成し、その基盤を支えに社会性・コミュニケーション能力が次第に育ってきた、発達障害児3名に対する指導の実践について報告する。

参考文献：(1) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課. 2012. 「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」 (2) 古池若葉. 2009. 「子どもの語用論的側面に関するアセスメント」. 『跡見学園女子大学文学部紀要』42. 87-101.

A4. 言外の「文脈的含意」に対して発せられるケドの機能

横田 敦子（お茶の水女子大学大学院）

本発表では、主節を伴わないケド節で言い終える発話文には、やわらげ表現以外に先行文脈から導かれた言外の文を再考するよう求めるマーカーとしての機能があることを Sperber and Wilson (1995) の関連性理論に基づき考察する。対話相手に対して認識補正の働きかけを行うというケド節文の機能は先行研究において指摘されているが、その認識補正は先行文脈から推論によって導かれた言外の文「P から Q」に対して行われるものであること、認識補正の性質は二つのタイプに分けられ、Sweetser (1990) で示された認知領域から説明できることを明らかにする。

参考文献：(1) 大浜るい子. 2009. 「接続助詞ケドの用法間の関係再考」. 『広島大学日本語教育研究』19. 1-9. 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座. (2) 白川博之. 2008. 「「言いさし文」の談話機能」. 串田秀也・定延利之・伝康晴(編). 『シリーズ文と発話 2「単位」としての文と発話』. 1-25. ひつじ書房.

A5. Get 受動文と再帰代名詞を含む Get 使役文の関係―聞き手の解釈に着目して―

久井田 直之（日本大学）

本発表の目的は、get 受動文(get+ 過去分詞)と再帰代名詞を伴う get 使役文(get+ 再帰代名詞+過去分詞)の関係について、先行研究を概観して問題点を明らかにし、コーパスのデータとインフォーマント調査に基づき、その関係を再考することである。Arce-Arenales et al. (1994) は、get 受動文が再帰代名詞を伴う get 使役文の意味で解釈されうると指摘している。しかし、Carter and McCarthy (2006: 797) は、“She got locked out.”を取りあげ、主語に責任はないと説明している。使役的な解釈と主語の責任が密接に関係しており、単文レベルでは、解釈には揺れが生じ、その原因は、主語の責任の解釈からくるものであると考えられる。本発表では、その関係についてコーパスデータとインフォーマント調査を通して、聞き手の解釈に注目して、両者の違いを明らかにする。

参考文献：(1) Arce-Arenales, M., M. Axelrod, and B. A. Fox. 1994. “Active voice and middle diathesis: A cross-linguistic perspective.” In: B. A. Fox and P.J. Hopper (eds.) *Voice: Form and function*. 1-22. Amsterdam: John Benjamins. (2) Carter, R. and M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

A6. 商標の普通名称化の評価をめぐる言語学的分析

堀田 秀吾（明治大学）・日置 孝一（神戸大学）・藤田 政博（関西大学）

本報告では、商標の普通名称化という現象に焦点を当てる。普通名称化というのは、「ホッチキス」や「正露丸」のように、商標が使われているうちに、その商品・サービス全体を指す表現になる現象のことである。

本報告では、Dreyfuss(1990)を参考にしながら商標に用いられる言語表現が有する機能という側面から商標の普通名称化という現象を論じた上で、本研究チームが行なった、普通名称化に関する ERP (Event Related Potentials 事象関連電位) の予備実験の結果を報告する。結果としては、一般名称化したある名称は、反応潜時としては、「商標=普通名称<普通名称化した商標を普通名称として認識するもの<普通名称化した商標を商標として認識するもの」という結果になり、ERP としては、普通名称化した商標を普通名称として認識する場合に N300 が観察された。

参考文献: Dreyfuss, R. C. 1990. “Expressive Genericity: Trademarks as Language in the Pepsi Generation.” *Notre Dame Law Review* 65. 397-424.

B1. Re-examining the “Sentence-final” Particle *ne* in Language Learners’ Conversations

GANIR, Paul (Stanford University)

The present study examines how learners of Japanese as a second language employ the Japanese pragmatic particle *ne* in their conversations inside and outside of language classrooms. Data taken from class and club sessions totaling roughly 34 hours reveal that intermediate learners of Japanese use the particle in three main positions: turn-final, turn-initial, and turn-internal. In particular, the turn-final and turn-initial uses were characterized by the use of formulaic sequences. Furthermore, the data indicate that the conversational environments of the language classroom and club activities do not affect the position of the particle. The results raise several issues in Japanese pedagogy and language acquisition, such as how to incorporate non-turn-final *ne* functions into current explanations and how to modify verbal interactions to provide learners more opportunities to engage in conversations that make use of linguistic devices like *ne*.

References: (1) Ohta, A. 2001. *Second language acquisition processes in the classroom: Learning Japanese*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. (2) Tanaka, H. 2000. “The particle *ne* as a turn-management device in Japanese conversation.” *Journal of Pragmatics* 32. 1135-1176.

B2. 疑問文を引用して主節で答える表現の手続き的意味

山泉 実 (明海大学)

(i)のように疑問詞疑問文を条件節で引用して主節で答える構文は、(ii)のように条件節・引用節を使わずとも真理条件を維持して単純な文に書き換えることができる。

(i) 何がダメかというとその値段だ。 (ii) その値段がダメだ。 (iii) What sucks is the price.

本発表では、前者の語用論的特徴を関連性理論の立場から探り、前者は後者にはない手続き的意味を持つと主張する。それは前景含意と背景含意（それぞれ前提、焦点とされていたものに概ね対応）をコード化し、聞き手の処理労力を軽減するというものであり、(iii)のような（擬似）分裂文の手続き的意味(1)と酷似している。また、(i)のような表現は、[2,4章5節]で提示されている発話解釈過程のモデルにおいて聞き手が自主的・無意識的に辿ることになる予想論理仮説構築などのプロセスを、聞き手に強制的・意識的・明示的に辿らせる。

参考文献：(1) Jucker, A.H. 1997. “The relevance of cleft constructions.” *Multilingua* 16. 187-198. (2) スペルベル, ダン・ウィルソン, ディアドリ. 1999. (内田聖二他訳). 『関連性理論：伝達と認知』(第2版). 研究社.

B3. 疑問文の文末表現に関する日中対照—動詞述語の『の(ん)ですか』諾否疑問文を対象に—

林 香淑 (首都大学東京大学院)

本発表の主眼は、「の(ん)ですか」疑問文に対して田野村(1990)、野田(1997)をもとに独自の分類を行い、それに対応する中国語の表現との対応関係を調べるところにある。具体的には述語以外の部分に疑問の焦点がおかれる場合、日本語の「の(ん)ですか」疑問文は中国語の「是……的」疑問文に対応しているのに対し、疑問の焦点が述語におかれる場合には「*ma*」疑問文、語調疑問文、反復疑問文などに対応する。また、疑問の焦点が述語におかれる場合は3種類の中国語の疑問文に対応しているが、どの疑問文に対応するのかは「前提」の性質および話者の表す含意によって決まる。

参考文献：(1) 呉紅哲. 2003. 「日本語の『ノカ』疑問文とそれに対応する中国語の疑問文」. 『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』16. 43-56. (2) 田野村忠温. 1990. 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』. 和泉選書. (3) 野田春美. 1997. 『日本語研究叢書9「の(だ)」の機能』. くろしお出版.

B4. 日本人英語学習者による意見文の論理展開—言語形式とその機能に着目して—

奥切 恵 (東京医療保健大学)・伊集院 郁子 (東京外国語大学)・小森 和子 (明治大学)

本研究の目的は、日本人英語学習者が英語意見文を執筆する際に、どのようなディスコースマーカー

を用いて論理展開を示そうとしているのかを、英語母語話者の執筆した意見文と比較することによって、検討することである。

意見文の執筆者は日本人英語学習者7名と英語母語話者8名である。分析の結果、学習者は“First..., Second..., In conclusion...”など、文章構成を表すディスコースマーカーを多用しているが、英語母語話者はこのような表現は使わず、“now that”、“still”や“even”といった副詞などを使用することにより、前の文章との結束性を保つような工夫をしていることがわかった。また、学習者の意見文には、母語話者と異なる“for example”の使用も認められた。これらの特徴が見られた要因として、第二言語で意見文を執筆する際に、言語運用力の限界を補おうとしてディスコースマーカーを多用している可能性や母語である日本語の書き方が転移している可能性が挙げられる。

参考文献：(1) Deborah Schiffrin. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press. (2) 伊集院郁子・高橋圭子. 2012. 「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴—『主張』に着目して—」. 『東京外国語大学国際日本研究センター日本語・日本学研究』2. 1-16.

B5. 日タイ両言語における「申し出」「依頼」に対する「断り」表現の研究—日本人およびタイ人の社会人を調査対象として—

福原 美怜（京都精華大学大学院）

本研究は、相手が自分の利益のために負担を提案する「申し出」と相手の利益のために自分に負担をかける「依頼」に対する「断り」表現に焦点をあて、日本語およびタイ語における「断り」表現の異同を明らかにすることを目的とする。その方法として、日本とタイの20～30代の社会人に調査協力を依頼し、「申し出」と「依頼」に対する「断り」をどのように表現するかというアンケートに回答してもらった。得られた結果を Beebe et al. (1990) の「意味公式」を利用し、両者がどのような種類の意味公式を用い、どれぐらいの発言回数で、また、どのような発話順序で「断り」表現を遂行しているかという観点で分析し考察した。

参考文献：(1) Beebe, L.M., Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R. 1990. “Pragmatic transfer in ESL refusals.” In: R.C. Scarcella, E. Andersen & S.C. Krashen (Eds.). *On the development of communicative competence in a second language*. 56-65.

B6. 異なる談話環境を繋ぐ言語行動—遠隔会話における対面性構築を中心に—

吉田 睦（東京学芸大学附属国際中等教育学校）

近年のICT環境の充実に伴い、言語教育においても遠隔コミュニケーションの可能性が議論されている。本発表では、ネットワークを介した遠隔会話を、日本語学習者・母語話者が接し得る接触談話の一つと捉え、談話分析の立場から言語使用を考察することを試みる。対象とする資料は、海外大学機関の日本語学習者グループと日本国内の母語話者グループをビデオカンファレンスシステムで接続した遠隔接触場面である。考察では、離れている二つの地点をリアルタイムで繋ぐという制約が、どのような言語的特徴として現れるのかを質的に記述し、視覚（画像の不鮮明等）、環境（母語環境同士の接続等）、音声（音質やオーバーラップ）の各観点に伴う会話構築を分析した。遠隔接触場面は、話者間の知識差が大きく、情報交換の過程が明確となる。対面性構築の様相を明らかにすることで、遠隔接触場面の言語使用と教育利用における課題を指摘した。

参考文献：(1) 尹智鉉. 2004. 「遠隔接触場面における調整軌道—ビデオ会議システムを用いた日本語教育の試み—」. 『日本語教育』123. 17-26. (2) 坊農真弓・片桐恭弘. 2005. 「対面コミュニケーションにおける相互行為的視点—ジェスチャー・視線・発話の協調—」. 『社会言語科学』7(2). 3-13.

Symposium: Clinical Discourse

Topic: What kind of contribution linguistic pragmatics can do to the studies of interaction in clinical and medical fields?

Exploring the Nature and Process of the Medical Discourse in the Light of Pragmatics

UEDA, Teruko (Aomori Public University)

The doctor-patient relationship has been described since the time of the Greeks, however, systematic study of the medical communication is a modern phenomenon. Although medical communication studies using quantitative methods have grown markedly even in Japan over the past decade, there have been few qualitative studies of doctor-patient communication. The Roter Interaction Analysis System (RIAS) is widely used in the US, Europe and Japan, as a major quantitative method for coding medical dialogue (Roter & Larson, 2002). In exploring the nature and process of the medical discourse, the following topics are addressed: (1) the characteristics, effectiveness, and limitations of RIAS, (2) interactional discourse analysis of doctor-patient communication, and (3) the other possibility of pragmatic analysis (Ueda, 2014).

Doctor-patient visits were audiotaped (N=78) in one hospital and two clinics in Tokyo and Osaka. First, they were coded using an adaptation of the RIAS. Second, considering the limitations of RIAS, interactional analysis was applied to clarify the nature and the process of a problem conversation and a consensual conversation in terms of "cohesion" and "coherence". Other types of pragmatic analysis are applied and discussed to better understand qualitative differences in the doctor-patient interaction.

References: (1) Roter, D., & Larson, S. 2002. "The Roter Interaction Analysis System (RIAS); Utility and flexibility for analysis of medical interactions." *Patient Education and Counseling* 46. 243-251. (2) Ueda, T. 2014. "Shinryo Bamen niokeru Kanja to Ishi no Communication" (In Japanese). Hituji Syobo.

When do children with high-functioning autism spectrum disorder comprehend figurative language literally?

OOI, Manabu (Kanazawa University)

Unlike their English-speaking counterparts, Japanese children with high-functioning autism spectrum disorders (HFASDs) perform as well as typically developing (TD) children in comprehending metaphor, despite lacking 1st order theory of mind (ToM) reasoning.

Additionally, although Japanese sarcasm and indirect reproach appear theoretically to need 2nd order ToM reasoning, HFASDs children without this comprehended these as well as TD children. We aimed to test the hypothesis that metaphor, sarcasm, and indirect reproach might be evaluated as more conventional than irony, which children with HFASDs do not comprehend as well as those with attention deficit hyperactivity disorder. The results for irony, metaphor, and indirect reproach supported the hypothesis, while those for sarcasm did not. This contradiction is discussed from a self-in-relation-to-other perspective. The need for a new explanation of disabilities of figurative language comprehension in children with HFASDs is suggested instead of relying on a single cognitive process.

What does linguistics contribute to research in clinical psychology and/or psychiatry?

KATO, Sumi (Aomori Chuo Gakuin University)

In the psychotherapy setting, the recovery of interpersonal relationships is only achieved by the use

of language. Most mental disorders do not have indicative biological markers. Thus the main tool for diagnosis is linguistic interactions. Necessarily, a significant degree of importance should be attached to the language used in psychotherapy research. Therefore, importance must be equally placed on linguistic research.

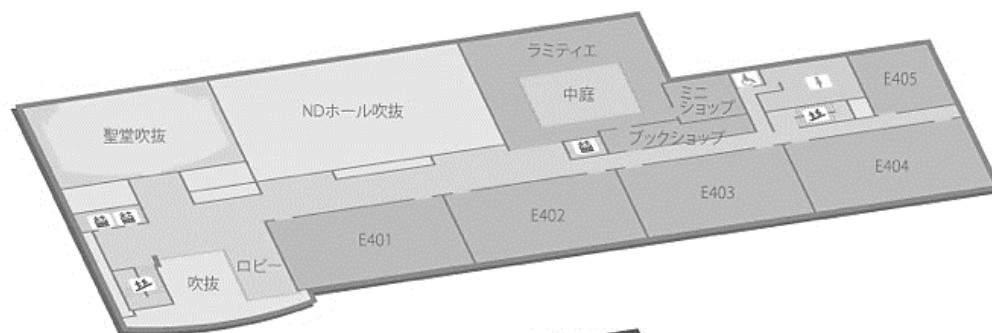
There are certain areas where pragmatics can clearly contribute to the research on psychology and/or psychiatry. A potential area linguistics can contribute to is, for example, making ASD's (autism spectrum disorder) linguistic behavior clear. In DSM-5 (issued in May, 2013), social (pragmatic) communication disorder was newly classified. It separates individuals with social communication deficits but with no restricted and repetitive behaviors or interests from ASD as defined in DSM-IV. It is obvious that pragmatics has a great potential to contribute to this area.

This presentation introduces JTCM as a pilot study developed by Kato (2012), which was amended from the original TCM (Mergenthaler, 1996). The potentially great contributions that linguistic can make to psychotherapy is demonstrated in this example of process research.

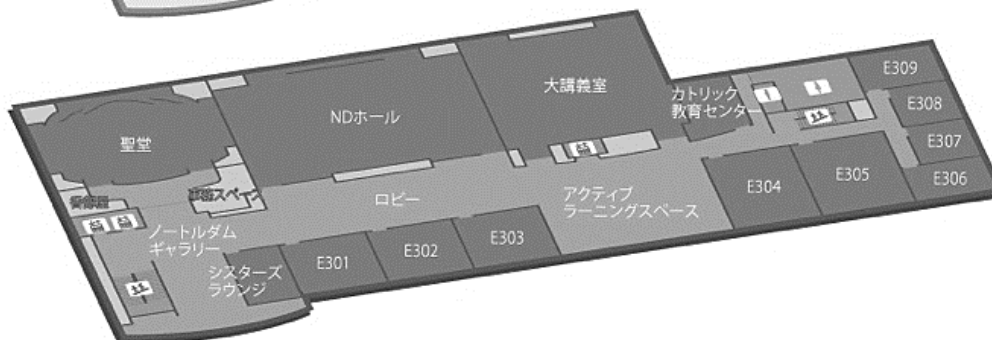
References: (1) Kato, S. 2012. "Development of amended JTCM from TCM and its adaptability to psychotherapy in Japanese-adaptation to individual therapy." *The 31st Annual convention of The Association of Japanese Clinical Psychology*. (2) Kato, S. 2012. "Development of amended JTCM from TCM and its adaptability to psychotherapy in Japanese-adaptation to family therapy." *The 29th Annual convention of the Family Psychology*. (3) Mergenthaler, E. 1996. "Emotion-abstraction patterns in verbatim protocols: A new way of describing psychotherapeutic processes." *Journal of Consulting and Clinical Psychology* 64. 1306-1315.

会場平面図

4F



3F



キャンパスマップ



主要駅からのアクセス

所要時間の目安は、「大阪から 52 分」、「三宮から 76 分」、「大津から 33 分」、「奈良から 75 分」です（乗り換え時間除く）。（※2014 年 3 月末現在）

各路線マップ



所要時間

大阪方面 大阪駅から 52分	JR大阪駅	新快速	29分	JR京都駅	地下鉄烏丸線	北山駅	徒歩	7分
	阪急梅田駅	特急	42分	阪急烏丸駅/ 地下鉄四条駅	地下鉄烏丸線	北山駅	徒歩	7分
	京阪淀屋橋駅	特急	54分	京阪出町柳駅	バス	野々神町	徒歩	2分
神戸方面 三ノ宮駅から 76分	JR三ノ宮駅	新快速	53分	JR京都駅	地下鉄烏丸線	北山駅	徒歩	7分
	阪急三宮駅	新快速	68分	阪急烏丸駅/ 地下鉄四条駅	地下鉄烏丸線	北山駅	徒歩	7分
滋賀方面 大津駅から 33分	JR大津	新快速	10分	JR京都駅	地下鉄烏丸線	北山駅	徒歩	7分
奈良方面 奈良駅から 75分	JR奈良駅	快速	52分	JR京都駅	地下鉄烏丸線	北山駅	徒歩	7分
	近鉄大和西大寺駅	急行	34分	近鉄竹田駅	地下鉄烏丸線	北山駅	徒歩	7分

特別講演会のお知らせ

「Elizabeth Closs Traugott 教授 講演会」のお知らせ

スタンフォード大学名誉教授エリザベス・トラウゴット先生をお招きし、下記のとおり講演会を開催いたします。先生の文法化・(間)主観化につづく最近のご研究について拝聴する貴重な機会になると思います。奮ってご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。お待ちしております。

講師： Professor Dr. Elizabeth C. TRAUGOTT (Stanford University)

日時： 2014年12月7日(日) 14:30~16:30 (受付 14:00~)

演題： The pivotal role of linguistic context in constructional change

場所： 青山学院大学 17号館6階 本多記念国際会議場

(JR 渋谷駅より徒歩 12 分、メトロ表参道駅より徒歩 9 分)

青山キャンパス アクセスマップ <http://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/access.html>

青山キャンパスのマップ <http://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/aoyama.html>

主催： 青山学院大学総合研究所プロジェクト「英日語の『周辺部』とその機能に関する総合的対照研究」 Joseph Dias、Elizabeth C. Traugott、東泉裕子、澤田淳、小野寺典子

共催： 日本語用論学会

(お問い合わせ先：小野寺 典子 onodera@cl.aoyama.ac.jp)

Pre-Conferenceのお知らせ

「日本語用論学会 2014 年 Pre-Conference 開催のお知らせ」

年次大会に先立ちまして、英国シェフィールド大学名誉教授のマイケル・パーキンス先生による Pre-Conference 講演会(龍谷大学文学部特別講義)を開催致します。会員の皆様の奮ってのご参加をお待ちしております。

講師： Professor Michael PERKINS (University of Sheffield)

(Emeritus Professor of Clinical Linguistics at Sheffield/英国シェフィールド大学
臨床言語学名誉教授)

日時： 2014年11月28日(金) 15:00~16:30

題目： How Pragmatics Can Go Wrong: An Overview of Clinical Pragmatics

内容： There appears to be no area of human communication that is immune to breakdown. I therefore begin this lecture by locating clinical pragmatics within the broader discipline of clinical linguistics, a sub-discipline of linguistics which emerged during the 1970s. I then consider the wide range of communicative

場所： 龍谷大学 大宮キャンパス 清和館3F ホール
(京都市下京区七条大宮大工町125-1 JR 京都駅から徒歩10分)

(お問い合わせ先：龍谷大学文学部 東森 勲 isao.higashimori@gmail.com)

小山哲春 (京都ノートルダム女子大学 人間文学部 英語英文学科)
杉村美奈 (京都ノートルダム女子大学 人間文学部 英語英文学科)
長沼光彦 (京都ノートルダム女子大学 人間文学部 人間文化学科)

久保 進（松山大学）
西光 義弘（神戸大学名誉教授）

澤田 治美（関西外国語大学）
山梨 正明（京都大学名誉教授、関西外国語大学）

35